

産経新聞

徳川綱吉を5代将軍に押し上げた大老・堀田正俊が貞享元(1684)年に若年寄・稲葉正休に斬殺された事件は、徳川政治史最大のスキャンダルかもしれない。

歴史の交差点

武蔵野大特任教授 山内昌之



歴史学者、小川和也氏の『儒学殺人事件―堀田正俊と徳川綱吉』は、この殿中殺人に綱吉の意志が動いていたという説を裏証した書物である。正俊は綱吉の度が過ぎる大愛護、能役者の

幕臣登用、大保護に落ち度があった近臣の処分などの不当性について諷言を繰り返していた。かねてこれを疎ましく思っていた綱吉は、大老辞職を促すが正俊は肯んじない。そこで正俊

可能性も否定できない。さて、その正俊が綱吉を称揚した『賜言録』という書物がある。『続々群書類従』(第十(三)に入っている)で、最近よくやく読む機会を得た。賜言とは、「包み隠さず公言する」と

おつとしたが思いとどまった。大老たる自分の職務は「天下の政」で、2児を救うのは「小恵」だからである。しかし、忍びない気持ちが残ったので後から家臣を送り、食物を与えた。翌日、これを聞いた綱吉は、

現代の賜言録を書くなら

いう意味である。名君録ともいえる本書には、2人の不和を思わせるものは少ない。むしろ正俊は、綱吉の英主たる所以を指摘してやまない。

正俊はある日、道端で泣いている2人の浮浪児を見つけて救

「是汝の感いなり」、仁の心(人間愛)を発揮するには事の大小は関係ないと述べた。「日月は照らさざる所なし。織界の微(ちり)のようにどんな小さなもの、みなその光を受く」

正俊は幕府官僚制の頂点に立

ち、幕政を全国レベルで動かす政治家でもある。しかし綱吉は、將軍の徳治を示すのに職位や権限の上下は関係ないと考えた。幕府官僚制は綱吉の改革政治にとって桎梏(ていこ)とも言い

を引いて、「水至りて清ければ則ち魚無し」と語ったが、これは初代將軍家康の好んだ言葉でもある。綱吉は「国家を治むる者、これと思はざるべけんや」と正俊に諭した。

『賜言録』が書名に恥じず、事実だけを記しているか否かは別に議論されるべき問題である。しかし綱吉は生類憐みの令に限らず、為政者の威令だけでは自分の描いた政治ビジョンが下まで達しない限界を痛感していた。参院選挙後の政治情勢について、是々非々で「現代の賜言録」を書くとするならば、どのような視点になるのだろうか。

(やまうち まさゆき)